

# 見立絵本『「道化生花」』について

高橋則子

大阪大学附属図書館忍頂寺文庫蔵『「道化生花」』（請求番号H-17）について、以下の順序に従つて述べる。

- 一、解題
- 二、写真版
- 三、翻刻
- 四、注釈
- 五、考察

## 一、解題

表紙 後のもの。薄茶色無地。縦十五・八cm×横十一・四cm。小本。  
題簽 なし。  
構成 序（一丁半）、本文（一十七丁。但し半丁に図版、半丁にその説明）、奥付（半丁）。  
序末 「安永七つのとし あらたまる春 酒樂斎書 美農」。  
内題 なし。  
柱記 なし。丁付けのみ。

丁付 序に「序」、本文に「壱へ廿七」。  
著者 酒樂斎瀧麿か。

匡郭 なし。字高縦十三・一cm×横八・〇cm。  
奥付 「安永七戌戌年 江戸橋四日市広小路 竹川藤助」  
蔵書印 静村文庫（忍頂寺務）。

本書は『国書総目録』には

見立花づくし みたてはなづくし 一冊 著 洒落斎 成 安永七刊  
版 阪大

とある。また、

道化生花 どうけいけばな 一冊 類 花道 著 洒落斎 成 安永  
七刊 版 栗田・村野

とある本も、本書との関係を推測させるが、栗田元次旧蔵書、村野時哉旧蔵書は、どちらも現在不明であり、確認できない。日本書誌学大系8『書誌学の発達』（昭和五四年刊・一九七九）所収「栗田文庫善本書目」には記載されていない。

国文学研究資料館データベースの『日本古典籍総合目録』には、「見立花づくし」は作者が「酒樂斎（洒落斎）」、安永七年刊、阪大蔵とされ、

また「見立花ぐらべ」は作者が「謡東斎」、安永七年成立、阪大忍頂寺文庫の請求番号 H<sup>17</sup>の本書にリンクされている。「道化生花」は、作者が「酒樂斎」、安永七年刊で、栗田、村野に版本所蔵と記される。

現在所見に及んだ個人蔵のもう一本は、栗田・村野に蔵されていたものとの関係は不明である。書誌を記す。

表紙 原のもの。縹色無地。縦一五・九cm×横一一・四cm。小本。  
題簽 後のもの。「花つくり 安永七年」と墨書き。

構成／奥付 大阪大学忍頂寺文庫本と同。

蔵書印 林若樹、古堀栄の蔵書印あり。未詳の印一つあり。

『大阪大学付属図書館所蔵 忍頂寺文庫目録』(平成二二三年三月発行)には、本書は一〇六ページに

戸竹川藤助 作品名は「国書総目録」による 81-228-66 H<sup>17</sup>

「道化生花」刊 小一冊 酒樂斎 安永七年一月自序 安永七年江

とあり、この『忍頂寺文庫目録』の書名を本論では踏襲する。

先行研究は、中野三敏氏が「見立て絵本の系譜」(昭和四七年・一九七一・『語文研究』三四号所収、後に『戯作研究』昭和五六年・一九八一年刊に再録)で、見立て絵本目録に

〔見立花ぐらべ〕小本一冊 安永七年刊 酒樂斎 江戸板 花の見立  
(「洒落本大成所収」)

と記載されているが、「洒落本大成」には収録されなかつた。その後同氏は「見立て生け花(二)」「見立花のお江戸」(『彷彿月刊』平成一三年・一〇〇一・七月号所収、後に『和本の海へ 豊饒の江戸文化』角川選書・平成二一年・一〇〇九・二月刊へ再録)の中で、一部分の翻刻及び注釈

(序・花・藍花・角かづら・高慢の花)をされ、書名を安永八年(一七七九)改刻本『童唄故実今物語』の広告より『見立花のお江戸』と推定する述べられている。本書忍頂寺文庫本についても、写真版四枚を掲載し、「見立花づくし」という仮題が与えられていることについて触れている。本書の作者は序の「酒樂斎」である可能性を、考察で述べる。文政元年(一八一八)成立三代目瀬川富三郎編の江戸人名録『江戸方角分』には、「酒樂斎」は未載である。先行研究では「酒樂斎」とされてきた著者名であるが、「写樂斎」は、「江戸方角分」には東洲斎写樂以外には存在せず、「酒樂斎」は記載されない。「謡東斎」も記載されない。

本書の挿絵は著者によるものか、他の画工によるものか判然としないが、安永五年(一七七六)刊の洒落本『近世左様候』に描かれる図は本書と類似した画風である。『近世左様候』の著者「藩中館新吾三」は、「明和伎鑑」の作者淡海三麿かとされているが(注1)、絵師が誰であるかは未詳である。

本書板元の江戸橋四日市広小路 竹川藤助は、明和九年(一七七二)刊『古今役者論語魁』・天明元年(一七八一)刊『混雜倭艶画』(湖竜斎画)の板元でもある。

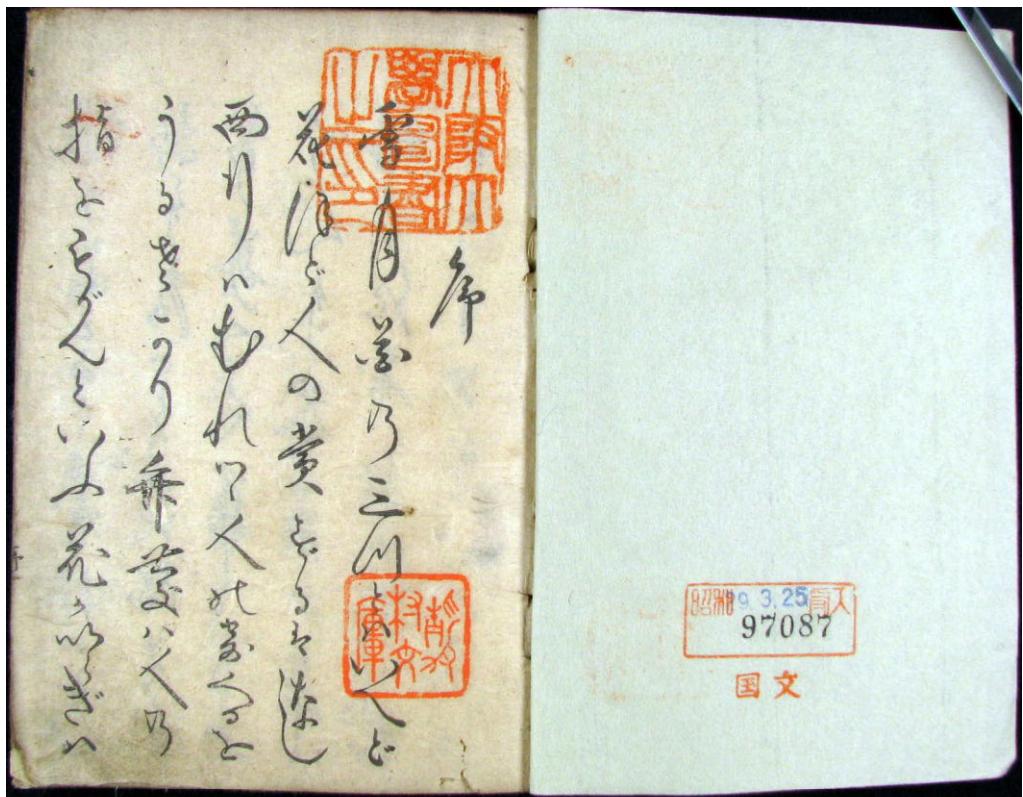
(注1)『洒落本大成』第七巻(昭和五五年・一九八〇・一月刊)解題(浜田啓介)。

二、写真版

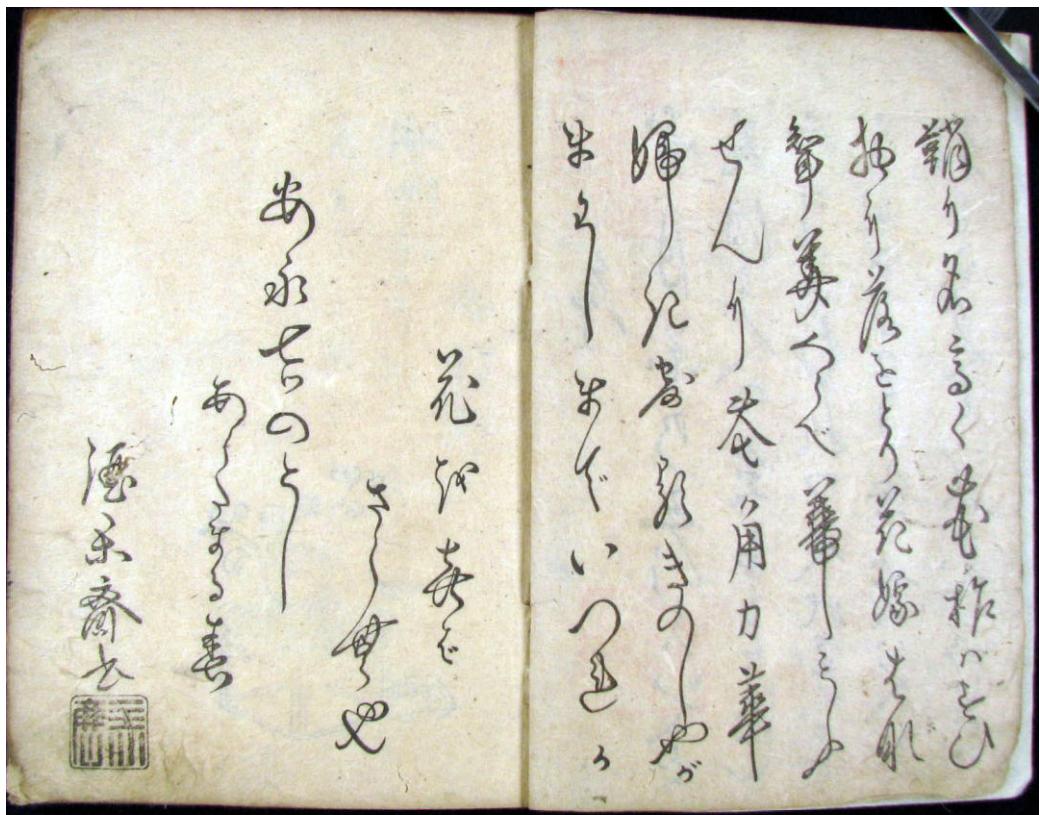
(表紙)



(序才・序ウ)



(一〇・一ウ)



(一ウ・一オ)



(一四三)



(三二・四〇)



(四ウ・五才)



(五ウ・六オ)



(六ウ・七オ)



(七ウ・八オ)



(八ウ・九才)



(九ウ・十才)



(十ウ・十一オ)



(十一ウ・十二オ)



(十一ウ・十三オ)



(十二ウ・十四オ)



(十四ウ・十五オ)



(十五ウ・十六オ)



(十六ウ・十七オ)



(十七ウ・十八オ)



(十八ウ・十九才)



(十九ウ・二十才)



(一一〇・一一一)



(一一一・一一二)



(一一一〇・二十三才)



(一一一〇・二十四才)



(一十四ウ・一十五才)



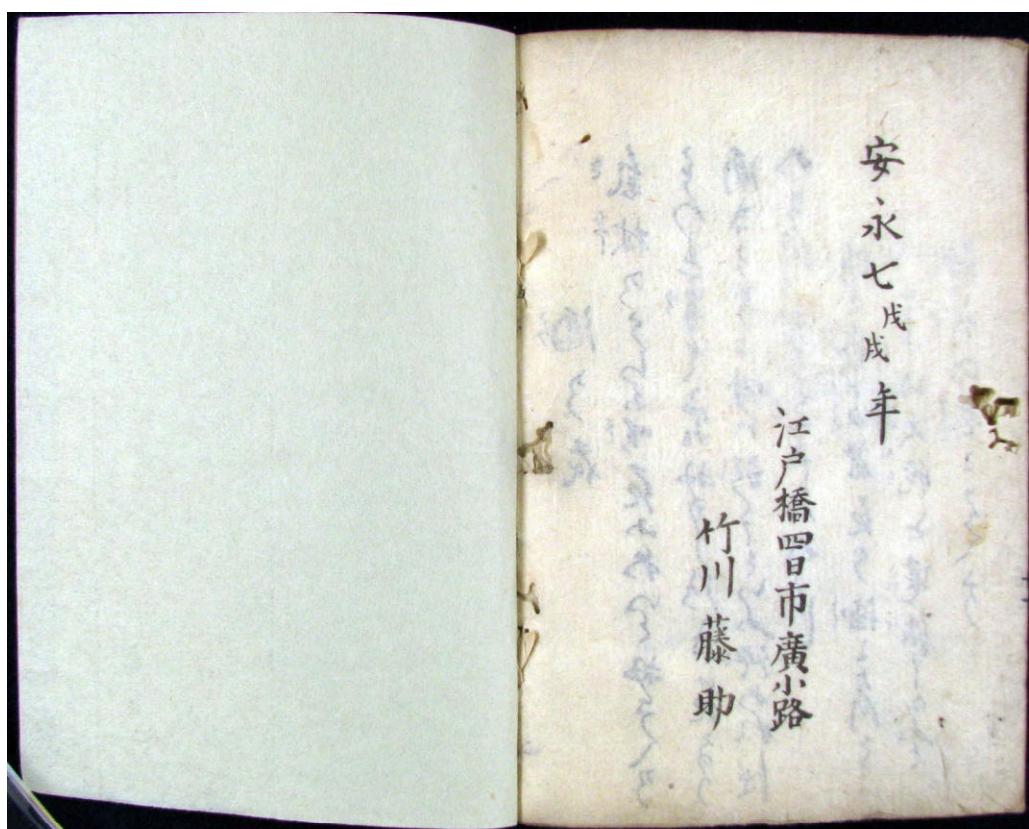
(一十五ウ・一十六オ)



(二十六ウ・二十七オ)



(二十七ウ)



(序) 雪月花の三つとはいへど、花ほど人の賞するはなし。西行はむれつゝ人の寄くるをうるさかり、弁慶は人の指をもがんといふ。花かいらぎは鞆に名高く、花杵はすひ物に落をとり、花嫁、はな婿、華くらべ、華もふせんに花角力、華ふき寄るきのしやがまわしまで、いつれか花を喜ばさらむや。安永七つのとし あらたまる春 酒樂斎書 美農

(1ウ・2オ) 浅草寺のかん木の根に多し。花はさかづきのうちにひらく。実は花の中に  
有り。

(2ウ・3オ) 木」との花  
花は寒中にさく。朝日にあふて落花す。  
花似白粉艶顏粧  
実成薄氷玉笄飾  
樂天も作れり。

(3ウ・4オ) 湯花  
至て清淨なる花なり。神前に咲。実は神たくよつてなるも、この実を喰へば火難災なんをまぬがるゝとかや。  
とかく王城の地につく、上品なる花なり。葉を万葉といふ。実は古今集

(5ウ・6オ) で花  
花は四でう半のうちに咲。実はぶくかげんにてなる。とかく物新らしきをいむ。此花の立よう、分て秘伝あり。千の利休此道に妙たり。

(6ウ・7オ) 寝入花  
夜る八つ時分より、七つ時分までさかり也。実を寝言といふ。摸と云けもの、このんで是を喰ふ。もろこしのろせい、此花一睡の内に、五十年の栄花をきわめしとかや。

(7ウ・8オ) 藍花  
こん屋のかめのうへに咲。雨をきらふ花なり。色さま／＼あり。実を玉といふ。此花のさかりをみんとすれば、明後日御出といふ。

(8ウ・9オ) もち花  
花は十一月廿日頃より、甚いぞがしく咲。実はいり物となる。又一種あり。名つけて日黒みやげといふ。此花大方品川の鉢うへとなる。

(9ウ・10オ) 法の華  
仏書曰此華を結縁する衆生は、皆令入仏道と説給へり。花を法華経といふ。実は極楽になる。ある人の句に、鷺のこゑ殊勝なり りんの音。  
薦かづらに類す。十一月顔見勢の時、しばらくの声を聞いて、切幕のうちより咲。葉はびん毬に似たり。一説曰、斎藤別当実盛篠原合戦の時、此葉

をもつて白鬚はくひをかくせし故事こしあり。

(11ウ・12オ) 波の花なみのはな  
一名塩花しおばなといふ。むかしさがの天皇の御宇、融とう大臣此花をすかせ給ひ、道みちはるへと、みちのくの千賀の浦より取よせ、庭前に植させ給ふ。然ども其後は、さうぞくしてもあそぶ人もなければ、貴之も詠ながめて君まで詠きみたへにし塩花の庭にはさみしくも見へわたるなり

(12ウ・13オ) 床花とこばな  
毎夜くるわの内に、蒲団ふとんのあいだ、又は多ば二入のうちにさく。此花落花はななづくわすれば、文と実のる。

(13ウ・14オ) に花にはな  
宇治より出るを最上さいじょうとす。花を茶のみ花ばなしといふ。ひとつとわらふてさく実みを茶のこといふ。東山ひがしやまよし政公まさき、大内おほの之介のすけに命じて、初て是をうへしめ給ふと、宇治の通とおゑんが夜話よわに出たり。

(14ウ・15オ) ます花はな  
さま／＼詠ながめつくしたる栄えいよう人の庭にわにさく花はななり。よつてます花といふ。  
此花実みのる時は、御新草ごしんそうといふ。摘つみわけて、玉の手たまていきなるは此花なるべし。

(15ウ・16オ) 高慢の花かうまんのはな  
かたち大き過すぎにして、花は髪ひげをなで、やに下さりて咲さく。なんでもしつたりふりにてさく花なり。

(16ウ・17オ) 見るめかぐ花みかぐはな  
此花とかく地獄ぢごくの土つちにそうわうして、しゃばにはなき花也。なれとも盆ぼんと正月の十六日には、勸善懲惡くわんせんていあくのために、閻王殿えんわうでんに立花りつばとす。悪人あくにんをみては、花くわつとひらき、善人ぜんにんを見てはねふるがごとし。葉はを鉄札てつさつといふ。実は閻魔えんまの帳てうになる。誠に是等まことを奇花怪草きかわいそうとやいわん。

(17ウ・18オ) お花おはな  
かたち六角かくにして、色源平いろげんぺいとわかる。花大小おほこちにしてひり、かんきんの名有り。正月さかりにして、二三月時分返花じぶんままであり。毛せんのうへに咲さく。みちのく山さんにこがね花はなさく

(19ウ・20オ) はつの花はな  
一名花よめといふ。花の色は山吹やまぶきに似たり。実は大尽だいじんの懷ふところになる。むかし陸奥国むつのかくに山田やまだといふ所より出たるとかや。大伴おほともの家持やかもちの哥おとこにすべらぎの御代みよさかべ栄さかへんと東あずまなる艶似桃花えんにしふじょう帶あぶら曉あさ烟えん花はなはおもはゆげに咲さく。実は新枕にいまくらといふ、うつくしき花なり。

(20ウ・21オ) 湯の花ゆのはな  
一名温泉いのんせんと名づく。すべて深山しんざんの麓ふもとに咲さく。実は壱廻ひとまわり過すぎてなる。いかなる難病なんびやうもこの花をせんじて用ゆる時は、忽平愈たゞまはぐいゆうたがひなしと、

ほんぞうかうもく  
本草綱目に出たり。

(21ウ・22オ) けん花  
此花土地の風俗によつて替る。上方の花は、橋づめに出て咲。出入立引の名有り。江戸氣の花は、あたまがちにしつ腰なし。甚酒を好む。実はあやまり証文となる。

(22ウ・23オ) 天狗の花  
花の色は赤く、六月祭礼の時に先に立る花也。此花落くわする時は、それまくくといふ。

(23ウ・24オ) 縁花  
たそがれ時に、人よく此花の本に集る。葉をつんで楽しむ。其名を一休草といふ。往来のもの、つむ事かたく無用と、名主月行事、是をいましむる。

(24ウ・25オ) 外花  
和訓にげ花といふ。実はかうやくになる。いけ花金草には、此花をあいしらふてよし。

(25ウ・26オ) 象の花  
むかし南越國より渡る。今に糹町におゐて、三ノ年に一度づゝ花さぐ。実はまんざつとなる。

(26ウ・27オ) 酒の花

氣林のうちに咲。花にあいとおさへのもつれ有て、最おもしろき花なり。  
酒きわまる時は、乱るゝといふ語あれば、あまり盛り過たるはあし。  
佐々呑尊、此花の徳によつて、ハまたの大蛇を退治し給ふと、神代の巻に見へたり。

安永七戌成年 江戸橋四日市広小路 竹川藤助

#### 四、注釈

##### (序)

○西行は群れつつ人の寄り来るをうるさかり『山家集』に「閑かならんと思ひける頃花見に人々のまゝで来れば 花見にと群れつつ人の来るのみぞ あたら桜の咎にはりける」とあり、謡曲『西行桜』にも「花見んと、群れつつ人の来るのみぞ、あたら桜の、咎にはりける~ひとり心を澄ますところに、貴賤群集の厭はしき、心をすこし詠するなり」とある。○弁慶は人の指をもがんといふ 須磨寺の梅樹に「此花、江南ノ所無也、一枝折盜ノ輩ニオイテハ天永紅葉ノタメシニ任セ、一枝ヲ伐ラバ一指ヲ剪ルベシ」の弁慶自筆の制札を立てて、庇護したと伝える。ただしこの説話の出典は未詳で、『義経記』には載らない。宝暦元年(一七五一)初演淨瑠璃『一谷嫩軍記』には、この弁慶の制札が重要な意味を持つものとして登場する。そして、ここでは梅ではなく熊谷桜についての制札となつている。

○花かいらぎ 花梅華皮。鮫皮に大粒の梅花形があるもの。刀の柄・鞘などに用いる。

はなば

○花杵 杵<sup>はなば</sup>はナラやクヌギの総称だが意味不明。花柚であれば、花・薔

・果実の皮の切片を酒や吸い物に入れて、その香氣を賞するもの。

○華くらべ 花合と同じで、東西に分かれ、種々の花を出し合つて優劣を競う遊戯。

○華もふせん 花魁。模様のある毛氈。

○花角力 春秋二期に興行した本場所の相撲に対して、それ以外の相撲。もと木戸銭をとらず、客の祝儀だけで興行したことからいた。花合と同じ。

○きのじや 安永九年序の洒落本『嘶之画有多』(『洒落本大成第九巻』所収)に「享保のすべ、中の町に喜右衛門といふものあり。元来小田原町生れにてありければ、りやうじなどこうしやにしけるにより、ふとだいの

ものやをおもひつき、角町かと

へみせを出せしに、めつらしき仕出しなりとて評ばんよく、喜

の字のかたへ肴を取につかは

すべきなど云はやしければ、し

ぜんと喜の字やとよびならわし

ける」とあり、その挿絵に店先

で板の上に生け花が活けてある

図が描かれている。吉原に出す

仕出し料理の大きな州浜型の台に飾った生け花ではないかと思われる。また、川柳に「喜の字屋の台にはびこる始皇帝」(台の物に松を立てる)もある。

○まわし 回し方の男。吉原では遊女の座敷・部屋・寝具・器物などの事を扱い、岡場所では女郎の送り迎えなどの雑事をする男のこと。



## (1ウ・2オ)

○酒中花 山吹の茎のすいなどで花鳥を作り、酒に浮かべて、ふくれて広がるのを見て興とするもの。

○浅草寺のかん木の根に多し 浅草の楊枝店で売られていたから。楊枝店を「楊」の字に柳の意味があることから、柳の木に例えたものと思われる

が、「江戸の楊枝店」(樋畠雪湖、『江戸時代文化』第一巻一号所収、昭和二年・一九二七年一月)によれば、房楊枝の中でも特に「灌木」と称するものがあった。これは柳ではないという意味で、男性用であり、桃などの木の先頭を湯煮して鉄槌などでたたきつぶして、針でできた櫛ですきあげて房としたもの。柳の楊枝は柔らかく先端をむしり取つて使用した。これお歯黒が剥落しないようにするためで、女性用であった。

## (2ウ・3オ)

○木ごとの花 雪のこと。『古今和歌集』巻第六冬歌に、紀友則の歌「雪降れば木ごとに花ぞ咲きにける いづれを梅とわきて折らまし」がある。

○花似白粉艶顔粧 実成薄冰玉笄飾 出典未詳。『漢詩大觀』(佐久節・昭和一年刊・昭和四九年復刊)、『白氏文集歌詩索引』(平岡武夫・今井満編、同朋舎出版、平成元年刊)、データベース『四部叢刊』(北京書同文数字化技术有限公司、二〇〇三年)による検索でも発見できなかつた。『本朝文粹漢字索引』(藤井俊博、株式会社おうふう)、『古文真宝』、『唐詩選』、『和漢朗詠集』にない。『円機活法』「雪」の項にも「の一節はないが、「春雪」の中に「似花開」という表現方法があると記され、例文として『古詩』の「春雪浦空来 触処花開」が引用されている。本作は作者自作かと思われる。

## (3ウ・4オ)

○湯花 神社で巫女や神職が、湯の沸騰時に上がる泡を笠の葉につけて、

参詣人にかけ、淨めたり神託を仰いだりする。図の花器は湯を沸騰させる釜、花は笹や御幣。

#### (4ウ・5オ)

○雪月花 和歌で最も多く詠まれるもの。花器は机、花は短冊・筆、硯。

#### (5ウ・6オ)

○で花 出花。出端。 番茶、煎茶で湯を注いだばかりの、香りのよい頃合い。 お茶の花柳界の言い方。「お茶をひく」(遊女に客がつかない)から、「茶」という語を忌むため。ここでは の意味と思われる。花器は風炉、花は茶杓に茶筅など。

#### (6ウ・7オ)

○四でう半 四畳半。茶室の大きさは、四畳半を基本とする。

○ぶくかげん 服加減。茶の湯で、茶の温度、濃淡などの具合。またそのちょうどいい具合のこと。

○千の利休 千利休。室町時代末～安土桃山時代に出た茶の湯の大成者。信長・秀吉に取り立てられ、特に豊臣秀長と提携して、秀吉の側近政治に深く関与した。秀長の死後、石田三成らに排斥され、秀吉から謹慎命令が出され、京都の自宅で切腹した。

#### (6ウ・7オ)

○寝入花 寝入り端。寝入つてまもない頃。花器は括り枕、花は廬生の夢。○八つ時分より七つ時分 午前一時頃から午前四時頃。

○猿 中国の想像上の動物。鼻は象、耳は犀、尾は牛、足は虎で、体型は熊に似るというもの。人の悪夢を食うといい、その皮を敷いて寝れば疫病を避け、その形を描けば邪気を払うといつ。

○もうこしのろせい 廬生。中国唐代小説の『枕中記』の主人公。廬生が邯鄲の客舎で、道士の呂翁に枕を借りてねむり、夢中榮華を極めた話。夢が覚めると黄粱をたく僅かの時間であったので、「黄粱一炊の夢」ともい

い、人生のはかないことにたとえていう。

#### (7ウ・8オ)

○藍花 藍をかめの中で発酵させる時に出る泡を「藍花が咲く」といつ。花器は藍かめ。花は刷毛やかきまわす棒など。

○雨をきらふ 染め物屋は雨を嫌うから。

○あい玉 藍玉。藍の葉を搗いて発酵させた上、臼でひき、乾燥し固めた染料。

○明後日御出 諺「紺屋の明後日」より。紺屋の注文の染め物の期日が、とかく延びがちであることから、約束した期日のあることならぬたとえ。

#### (8ウ・9オ)

○もち花 餅花。 正月、小正月、節分などに各家で行う予祝行事の一つ。柳、竹などの木の枝に餅をちぎってつけ、花の咲いたようにしたもの。神棚や室内に飾る。江戸目黒不動などで売った縁起物。赤、白、黄などに彩った餅を花のように木の枝につけたもの。花器は餅搗きの臼。花は杵、柳の餅花。

○目黒みやげ 目黒不動尊参りの土産として、餅花を買った。

○品川の鉢うへ 品川の遊郭で、餅花を室内装飾に用いたという意味。「餅花の月越になる不届さ(品川泊まり)」「しわん坊連れの餅花ことづかり(品川のつきあいせす)」「餅花を下戸取集め持つてくる(上戸は皆品川へ)」「餅花をことづかひたでにぢられる(上戸は内儀に)」

#### (9ウ・10オ)

○法の華 法の蓮の花。仏に供える花。また、仏道の精華。花は経典、数珠。

○結縁 仏道に縁を結ぶこと。大切にする、関係すること。

○皆令入仏道 「法華經 方便品」より。すべては仏道修行のたよりとな

るという意味。

○鶯のこゑ殊勝なり　りんの音　『古典俳文学大系』CDROM 版索引によつて調査すると、類似作品に「鶯の経よみうつや花のりん」(『犬子集』巻第一、寛永十年一六三三刊、松江重頼)があり、花の輪(花びら全体)で鶯が鳴く様子を、「経読鳥」の異名がある鶯に「鈴(読経の時にたいて鳴らす小鉢状の仏具)」を打つ」ことをかけて詠んだものである。同句は『嵐山集』(慶安四年一六五一鷄冠井良徳)にも載る。本作は作者自作か。鶯の鳴き声は殊勝である、りん(輪、鈴)の音だから、という意味か。

#### (10ウ・11オ)

○角かづら 角鬢。角前髪鬢の略称。江戸期には元服の一~二年前、前髪のきわを僅かに剃る習慣があり、これを角を入れると称して、その髪型を角前髪と呼んだ。この髪型を模したのが角鬢で、「暫」や曾我五郎の扮装にこれを用いた。これを蔓草の総称である葛(蔓)にかけたもの。花器は暫の衣裳である柿色素袍や力紙や侍鳥帽子、花は市川家の定紋である三升の紋入りの大太刀や角鬢。

○薦かづら 蔓草の総称。葛(蔓)。

○切幕　『戯場訓蒙図彙』(式亭三馬作・享和三年一八〇三刊)には、揚幕と切幕が併記され、「花道の出入口に懸る。花色地にて座元の定紋を大紋に染め出す」とあり、「切幕」と「揚幕」が併用されていたことがわかる。揚幕は、能の揚幕の変形であり、花道の突き当たりにある幕で、紺地に櫻紋もしくは興行会社の紋を白抜きで染めた幕に、金属の環をつけ、左右に開閉するもの。寛政九年(一七九七)に花色地から紺色に変わった、という(『演劇百科大事典』)。

○びん毬 髮(頭の左右側面の髪)と髪もしくは耳のわきの髪。

○一説曰斎藤別当実盛)　『平家物語』卷七で、石橋山合戦で頼朝と戦つて平家方についていた斎藤別当実盛が、赤地の錦の直垂を着て戦い、手塚の太郎と組んでも名乗らずに首を取られ、木曾義仲に「いまは定めて白髪にこそなりぬらんに、びんぴげの黒い」をあやしけれ」と不思議がられて、洗わせてみると白髪になつたといふ話からいじつけた。

#### (11ウ・12オ)

○波の花 白波を花に喩えていう語。食鹽の女房詞。ここでは の意味。花器は塩の山、花は青海波模様の担桶とそれを前後にかけて担ぐ棒。

○塩花 潮花とも書く。白浪。潮が飛び散る様子。不淨を清めるためにふりまく塩。料理屋などの客商売の家の出入口に、三つまみ並べ置く塩。もりしお。ここでは の意味。

○融大臣 源融。八一二年~八九五年。平安初期の、嵯峨天皇の皇子。河原左大臣と称された。左大臣にまで昇進したが、藤原良房・基經らの執政にこれを用いた。これを蔓草の総称である葛(蔓)にかけたもの。花器は、陸奥の塩釜(宮城県松島湾内の塩釜の浦)の景を模したこと有名である。

みちのくの千賀の 謡曲『融』に、「陸奥の千賀の塩竈」が複数回使われている。

然ども其後は、さつぞくしてもあそぶ人もなければ、貫之も詠て、「君まさで詠たへにし塩花」、『謡曲『融』』に、「しかれどもその後は相続して歌ふ人もなければ、浦はそのまま干汐となつて、されば歌にも、君まさで、煙絶えにし塩竈の、つらさびしくも見えわたるかなと、貫之も詠めて候」とある。

○君まさで詠たへにし塩花の 庭さみしかも見へわたるなり　『古今和歌集』巻第十六 哀傷歌に、紀貫之の「君まさで煙絶えにし塩竈の つらさ

びしくも見えわたるかな」が載る。その詞書きに「河原左大臣の身まかりてのち、かの家にまかりてありけるに、塩竈といふ所のさまをつくれりけるを見てよめる」とある。和歌は貫之の歌のもじり。

(12ウ・13オ)

○床花 遊里で、客がその女郎と馴染みになつた(二三余田)しるしに与える祝儀。寝床の中で与える花の意。洒落本『傾城買四十八手』(山東京伝画作・寛政一年一七九〇刊)の「見ぬかれた手」で、「部屋ざしき(大見世の部屋持ち女郎のことか)」の女郎が、名代(馴染みの客が重なつて、後の客には新造を代理で出す)の野暮な武士客が帰ると言つて拗ねるところを、冷静にうまくあやつりつつ「こちらのさむらい客をば、たかをくゝつて居るゆへ、まづ三会めの客をつとめ、もはや床花の三両もしめてきたゆへ、大の平氣なり。此うちを一両はやり手の時がりをかへし、二分は小間物屋の内金にわたし、二朱はかし本やはらひ、一分はあんまの心づけと、心のうちではさん用しながり……」とある。暦三(大夫・天神が廃絶した宝暦以降は、遊女の最高位。散茶女郎から発生したもので、平の揚げ代が昼夜で三分一両を仮に十万円とする、七・五万円であつたために生じた呼称)の床花は千疋、即ち二両一分といつのが定例だつた。花器は煙草入れ、花は一両小判が二枚ずつ。

(13ウ・14オ)

○に花 煮端。煎じたての味も香りもよい頃合いのお茶。でばな。いれば手に、茶碗を左手に持つて腰掛け、宇治橋供養の時の話をする。それを取り入れたものか。

○茶のこ 茶の子。仏事の配り物。茶うけ。茶を飲む時に食べる菓子、またはその代用品。ここではの意味。

○東山よし政公 日本で最古の花道書とされている『仙伝抄』は、奥書きに「頼政(義政の誤りとされている)」の名が見え、その後半には「相阿彌筆 義政公御成式目一巻」が付される。なお、『仙伝抄』には元和版寛永版の版本がある。

○宇治の通ゑん 茶人。大慶庵と号し、宇治橋岸に住み、茶をたてて売る業とした。宇治橋の東詰めに「通円の茶屋」として、有名な茶を売る店があつたが、これはその後のことである。『都名所図会』宇治橋の項に載る。ただし、狂言には、東山義政公の話には触れられない。

(14ウ・15オ)

ます花 増花。より愛する女。花器は振り袖、花は簪や笄や櫛。

栄よう人 栄耀人。贅沢をし尽くした人。金持ち。

御新草 ご新造。武家または富商の妻の敬称。中流以上の町家の妻にも用いた。明和七年(一七七〇)刊『蕩子筌枉解』の中に「江戸近在の名主につけだされ今御新ざつとよばれしかもなんのふ自由もなくやらしける女郎」とあり、本書の場合も、遊女が富商に請け出され、子供ができる新造となつたことを表す。

(15ウ・16オ)

いき過 行過、「ゆきすぎ」とも。余りに通人ぶつて、かえつて通人らしさを失うこと。度をすぎた意気。しゃれすぎて、かえつていやみなこと。やに下り 肘を張り、煙管の雁首を高く上げ吸い口を低くしてくわえること。転じて通人ぶつた態度。また大小の落とし差しのこともいう。花は落とし差しの刀、やに下りの煙管、本多頭、大坂頭巾(竹田頭巾・亀屋頭巾とも)、扇子。安永四年(一七七五)刊『金々先生栄花夢』(恋川春町画作)で金々先生が吉原へ通う時の様子が、落とし差し、大坂頭巾で、通うものがある。

しつたりぶり 知つたり振り。知つたふりに同じ。知つた風をすること。安永二年刊『近世風俗通』「中之息子風」に「この風俗はもつての外の高慢。…知らいでもしつたりぶりかよし」とある。

(16ウ・17オ)

見るめかぐ花 見目嗅鼻。閻魔の庁にある人頭どうの称。はたほこの上に男女の頭を載せた形のもので、男(見目)は凝視し、女(嗅鼻)は嗅ぐ相を示す。これによつて亡者の善惡を判断する。



鉄札 閻魔の庁で、人間の善惡を記す鉄製の札。花は見目嗅鼻で、葉は鉄札、筆。

(17ウ・18オ)

○お花 阿花独楽。辻賭博に使う六角形の紋独楽のこと。『宝曆現来集』に「辻賭博とて、これも寛政中頃迄は、専ら市中繁華なる處へ出て、往来の人勝負せり。田舎道などは猶さらなり。是はなこま逆、六角のこまへ紋

六つ書、又紙へ同じ紋を六つ書置て、人々好みの紋へ銭四文のせ置ば、こまを巡して、上方へ出たる紋へ十六文遣ける」とある。『隨筆辞典2』(朝倉治彦・昭和三五年刊・東京堂出版)「独楽の模様」の項に、お花独楽の諸説が載り、お花独楽は、古くはだるまや桃太郎の絵を描いたり、花の絵を描いたりしたが、必ず女を描き、その所が出ると勝ちになつたといふ。また、札は独楽と同じ絵で少し大きく、心棒は銀メッキ、惣体黒の上花ぬり、絵の部分は絹地に金箔を押したもの、といふ。

花器はお花独楽、葉は独楽と同じ絵が描かれた札、花は錢。

(18ウ・19オ)

むかし陸奥国山田といふ所より出たる『続日本紀』巻第一七聖武天皇天平勝宝元年(七四九)の記事が文献上の産金の初見とされる。聖武天皇が東大寺に御幸し、陸奥国の黄金産出を仏の恵みと慶賀して、このことを仏前で詔する中に「此の大倭國は天地開闢けてより以來に、黄金は人國より献ることはあれども、斯の地には無き物と念へるに、聞こし看す食國の中の東の方陸奥國守從五位上百濟王敬福い、部内の少田郡に黄金在りと奏して献れり」とある。一六世紀初期までは陸奥の砂金地帯(宮城県北部から岩手県南部)が主要な金の产地であった。少田郡とは小田郡とも記し、現在の宮城県遠田郡東部に当たる地域。山田は小田の誤りか。百濟王敬福とは、百濟義慈王の四世の孫で、郎虞の子供。以後常陸守、出雲守等を歴任する。

すべらぎの御代栄んと、『万葉集』巻第一八に大伴宿禰家持の歌が「陸奥國より金を出せる詔書を賀く歌一首」の詞書とともに「葦原の瑞穂の國を天降り領らしめしける」陸奥の小田なる山に黄金ありと「海行かば水浸く屍 山行かば草生す屍」の長歌の反歌として「天皇の御代栄えむと東なる陸奥山に黄金花咲く」とある。花は黄金の小判。

(19ウ・20オ)

はつの花 初花。年頃になりかけた少女の形容。また初潮の意味もある。一名花よめといふ、「花」が花嫁の略称である場合もある。新婚の花嫁の意味か。花器は耳盥(鉄漿付けに用いる)とその上に鉄漿壺やふしの粉を載せる台、花は鉄漿付け用のはねようじもしくはおはぐろ筆の房楊枝とう。

清如春柳含初月 艷似桃花帶曉烟 出典未詳。ただし平賀源内作『根南簪』

志具佐<sup>シキサ</sup> 一之巻(宝暦二三年刊・一七六二)に、「一代目瀬川菊之丞の美貌を形容する語として使用されており、「きよき」とはしゆんりうのしよげつをふくむがことく、ゑんなることはとづくわのきやうゑんをおぶるにに

たり」の読みとなつてゐる。また、本書より後の天明一年(一七八一)刊洒落本『鯉池全盛廻』には、「其の清き事は春柳舍<sup>しゅんりゅうしゃ</sup>初月艶なる事は桃花<sup>とうか</sup>帶曉<sup>ときあさ</sup>烟<sup>えん</sup>」とあり、これも本書の読み方と異なつてゐる。

(20ウ・21オ)

湯の花 鉱泉中の成分の一部が沈殿して取り出された物。花器は岩、花は吹き出す温泉。

実は壱廻り過てなる 湯の花の沈殿物が、ある程度の時間を経てできることをいうか。

本草綱目に出たり 『本草綱目』卷五「温湯」の「主治」に「緒風筋骨攣縮及肌皮頑痺手足」とあり、温泉が様々な病に効能のあることは記されているが、「湯の花」に関する記述は見いだせない。

(21ウ・22オ)

上方の花は橋<sup>は</sup>づめに咲 雁金五人男もの決定版である竹田出雲作『男

作五雁金』(寛保二年・一七四二・大坂竹本座初演)の「安治川芝居足揃の段」で、武士角左衛門の額に傷をつけた雁金文七ら男達一行を、角左衛門は安治川橋で待つてゐる。そこで一行と喧嘩になり、だまし討ちにされ、文七らは角左衛門の死骸を川に投げ込む、という場がある。花は結び雁金(雁金文七)、「安」の字(庵平兵衛)、唐団扇と包み(布袋市右衛門)、千の上を槌形の極印二個が交叉(極印千右衛門)、太鼓と撥(雷庄九郎)のそれぞれの紋と尺八、一本差しの刀、また、頭巾と下駄は主に上方で上演された黒船忠右衛門ものが有名であり、忠右衛門を当たり役とした姉川新四郎に因み、姉川頭巾と呼ばれる。

あたまがちにしつ腰なし 最初は威圧的だが、尻腰が無い(意氣地がない、だらしがない)。

(22ウ・23オ)

六月祭礼 江戸では都市特有の夏祭に特色があり、六月には山王権現祭礼、赤坂氷川神社祭礼、神田明神天王祭、佃島の住吉神社祭礼などが集中していた。祭礼の時には神輿渡御の先導に立つ猿田彦神は、鼻高の赤面をつけて矛を持ち、金襴の紺の鳥兜を被る。花は猿田彦の面、矛、鳥兜。

○それまく―― 祭礼で饅頭などを時いたか。

(23ウ・24オ)

縁花 縁端<sup>えんぱな</sup>。縁側のはし。縁先。花器は煙草盆、花は煙管や煙草入れ。夕方、縁側で煙草を吸いながら一休みして油を売ることを表す。

名主月行事、是をいましむる 町名主は・上級町役人であり、火の元の取り締まりも行つた。また五人組組員の中から毎月交代で町用・公用を務めた月行事にも、喧嘩口論の仲裁や火の番・夜回り(冬から春)の職務があつた。故に往来の者がみだりに縁端に集まり、煙草を吸つておしゃべりをするなどを嫌がつた、ということか。

(24ウ・25オ)

外花 外科。『人倫訓蒙図彙』(元禄三年刊・一六九〇)に、「【外科】外相に出る腫物を療するゆへに外科と号す…」とあり、更に「【金瘡】手負其外一切の疵最詮要の法なり。此人躰大氣にして物に動せざるをよしとする。小気にして臆したるは本人よりさきに散乱す。是金瘡の下品也」と別記されている。花は鍔や剃刀。

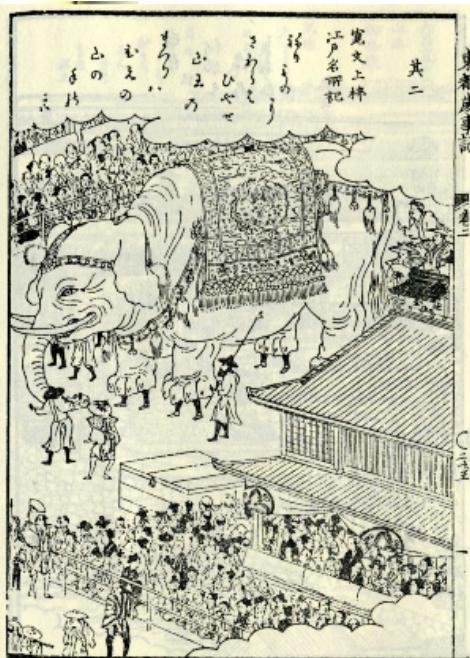
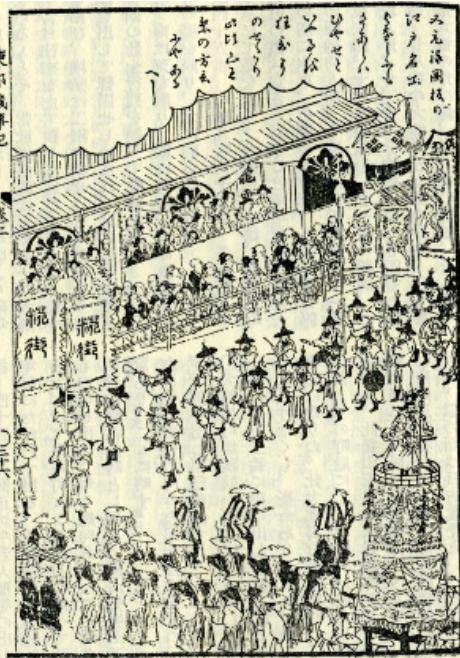
(25ウ・26オ)

むかし南越国より渡る 享保二三年(一七二八)に長崎渡來し一四年五月に江戸に到着(『武江年表』)した広南の象のこと。南越とは中国古代

の国名で、広東、広西、ベトナム北部を領域としたもの。この時の象については、「象の貢の物語」（武藤純子、『武道』六月号所収、平成元年・一九八九・刊）、「象の旅 長崎から江戸へ」（石坂昌三、平成四年・一九九二・刊、新潮社）が詳しいが、その他にも「藏書印のゾウ」（丹羽みさと、『環境という視座 アジア遊学』143）がある。広南から吉宗に贈られた象は、牡牝二匹が長崎に上陸したが牡のみが生き残り、江戸までの街道を、途中京都御所で從四位広南白象といつも、踏破した。

今に糰町におゐて三ノ年に一度山王祭で糰町から大象の作り物を出すことをいう。『東都歲時記』（天保九年刊・一八三八年刊・一八三八年刊）に、「糰

平成二三年七月）がある。広南から吉宗に贈られた象は、牡牝二匹が長崎に上陸したが牡のみが生き残り、江戸までの街道を、途中京都御所で從四位広南白象といつも、踏破した。



町より朝鮮人来朝のねりものにて、大なる象の造りものを出しける事世に名高し。今は年々に出でずして付祭の番に当たりし時これを出す。」とある。また、これはぬいぐるみで作られた象で、糰町三丁目にあつた伊豆藏拾遺）がある。『浮世絵芸術』一一七号（平成一〇年刊、一九九八）裏表紙に歌川重宣画の「江戸名所 山王まつり」が載り、糰町の作り物である布製の象が近景に描かれ、その解説（武藤純子）もある。

実もまんむつとなる。象がまんじゅうを餌のひとつとして食していたことは、『象の旅』（石坂昌三、新潮社、平成四年刊・一九九一）にも書かれ、また摂津国菟原郡深江村の大庄屋吉兵衛文書に「まんちうは麦まんちう あんなしち八十、但内二三十はあん入」（『古文書通信』第一九号、一九九三年一月「享保の象行列」今林澄子）とある。花は象の顔や耳。木は象を引き回す際に使用した轍口。

## (26ウ・27オ)

氣林 氣はやし。氣晴らし。花は盃、柄杓。

あい 間。相、会、合とも書く。他の者同士が盃のやりとりをしている間に入つて、盃を受けること。

おさへ 押。盃を差された時、おしどめてもう一度飲ませる」と。また押し止められてもう一度飲んだ盃。『郭中奇譚』（明和八年刊か・一七七一）に「客 ソレ半七おさへのだ 茶屋亭主半七 わたくしも二田ゑひでござります、モシ花紫様さしあげませう 女郎 ナニのみもしなんしんもの、ソンナ盃はいや 茶屋半七 藤介殿チヨシトおあい」とある。佐々呑尊（ハまたの大蛇）『古事記』上巻及び『日本書紀』神代上に、須佐之男命（素戔鳴尊）がハ俣（ハ岐）の大蛇をハ塙折（ハ醸）の酒（何度も醸造した強い酒）で酔わせて十拳剣（十握剣）で斬り殺し、草薙の剣

を得て櫛名田比売（奇稻田姫）と婚姻する件がある。佐々呑尊は須佐之男命の地口。

## 五、考察

見立繪本である本書の内容から判断すると、作者「酒樂斎」は狂歌に關係した人物である可能性がある。狂歌師人名録『狂歌知足振』（天明三年刊・一七八三）に載る狂歌師の中で「酒樂斎」を名乗る人物は記載されていない。また同年刊行『狂歌師細見』にも「酒樂斎」は見いだせない。

昭和二年（一九二七）七月発行の雑誌『本道楽』第三巻三号所収の「鳴呼奇々蘿金鶏」の中で、野崎左文は「よしの屋酒樂」は天明年間の一、三の狂歌集に載る酒樂斎瀧麿と推測され、赤良、橋洲、菅江等と交わつたらしい形跡があることが記される。また宿屋飯盛の文化元年（一八〇四）の紀行『草まくら』に、「爰に酒樂といへる者はたとせばかり昔大江戸に來りてやつがれが許へも訪ひ来りければ」とあることが紹介され、その言葉の通りとすると、天明四年（一七八四）に酒樂は石川雅望の許を訪ねたことになる。酒樂斎瀧麿が本書の作者であるならば、宿屋飯盛こと石川雅望と知り合う以前に本書序文は記されたのであり、刊行されたのも飯盛と知り合つ以前である可能性がある。

『狂歌人名辞書』（狩野快庵編・昭和三年刊・文行堂）には、

瀧麿　酒樂斎瀧麿、又吉野庵酒樂とも号す、通称吉野七兵衛、駿河新通七丁目に住す、安永九年「二丁町細見」を作る、狂歌は四方赤良門人、寛政十年没す。

とある。『狂歌大観 索引篇』（狂歌大観刊行会・昭和六〇年刊・明治書院）には、「酒樂」で該当するのは寛文九年（一六六九）跋の狂歌絵本『狂

遊集』所収のもののみであり、年代から見ても同一人物である可能性は低い。『天明五大狂歌集総句索引』（宇田敏彦・平成八年刊・若草書房）作著別索引には見つからなかつた。つまり『万載狂歌集』・『狂歌若葉集』・『徳和歌後万載集』・『狂言鶯蛙集』・『狂歌才藏集』には酒樂斎瀧麿の狂歌は記載されていない」ということである。

『石川雅望研究』（柏谷宏紀・昭和六〇年・一九八五・刊・角川書店）天明六年（一七八六）の事項に、喜多川歌麿画の大判三枚続浮世絵「三保の松原道中」に宿屋飯盛（石川雅望）の狂歌が載るが、この絵は酒樂斎夫婦が駿府と江戸を行き来する様子が描かれていることが指摘される。加えてこの絵が載る『原色浮世絵大百科事典』第七巻（昭和五五年・一九八〇・刊・大修館）に、駿河二丁町に住む酒樂斎瀧麿が、四方赤良門に入つたことを記念して作られたものであるとの解説も紹介されている。付け加えると『原色浮世絵大百科事典』解説には、この絵が鳶屋重三郎板であり、「歌麿・薦重・狂歌師達の関係が如実に理解できる好例」とされている。歌麿も薦重も、それぞれ「筆の綾丸」「薦の唐丸」の名を持つ狂歌師でもあつた。なお、この絵に書かれている狂歌等を翻刻する。

天のはころもいくかへり　するかのくにすみさけを　樂とかいへる  
やとりのあるし　瀧麿ぬしをことふきて　「羽衣の酒をたのしむ

哥は　あづまあそひのするかまひかも」　四方赤良　珠流河二丁町

酒樂斎のあるし　わか大人の門に入てたはれ哥よめるときゝて文のたよ  
りにつかはしける　「たはれ哥　これもなか／＼氣のくすり　もとめに  
のぼれ　蓬萊のやま」　つぶり光　「たはれうた　するかさいくのだけ  
高く　さてもあみたり　よくつゝりたり」　宿屋飯盛  
更に『石川雅望研究』天明八年（一七八八）春の事項に、雅望が多色刷り狂歌絵本『画本虫撰』（鳶屋重三郎板）を編纂したことが記される。そ

中の笛の狂歌を酒樂斎が担当し、「佐保川の水も汲ます身は笛 中よしのはのくされゑんとて」が載る。延宝三年（一六七五）序、太田叙親、村井道弘編『南都名所集』には、「佐保川の笛は、八景第四なり」とあり、佐保川の笛が南都八景の一つであったことがわかる。また、西三条権中納言公時の「晩来千点流笛乱」という一節のある漢詩や、前内大臣公忠の和歌「飛ばたる かけをうつして さほ川の 浅瀬にふかき心をぞしる」が載る。笛で有名な佐保川が、吉野から流れてくることを踏まえ、自分の名前をも詠み込んだものであろう。

『石川雅望研究』には、石川雅望著の紀行文『草まくら』文化元年（一八〇四）四月一四日の条に、駿府に着いた雅望が酒樂斎に会おうとしたが、既に寛政一〇年（一七九八）に没していたという記述が載り、その注に、雅望が『六樹園狂歌』の中で瀧麿について詠ずる歌を詠んでいること、山東京伝画作の黄表紙『富士人穴見物』（天明八年刊）に、仁田四郎を人穴に案内する駿河町で名高い「酒樂」として登場すること、北尾政美画・山東京伝作の黄表紙『吉野屋酒樂』（天明八年刊）は、酒樂斎瀧麿を主人公としていること、喜多川歌麿画・山東京伝作の黄表紙『嗚呼奇々蘿金鶏』（寛政元年刊・一七八九）に、金鶏が京都から江戸へ下る途中で駿河二丁町の吉野屋酒樂の許に身を寄せることとなつていてことなどから、酒樂は駿府の娼家の主人であつたと推測されている。加えて酒樂斎瀧麿に、見立絵本『嘶始小通形』（寛政初期）の作があることをも指摘している。

『喜多川歌麿展 解説編』（平成七年刊・一九九五、浅野秀剛、ティモシー・クラーク、千葉市美術館・大英博物館）の浅野氏解説によると、『絵本吾妻遊』（寛政二年初春序刊、葛屋重三郎板）と『絵本駿河舞』（寛政二年初春序刊、葛屋重三郎板）は前編と後編の関係にあり、どちらも江戸名所を描いて狂歌を配した内容で、序文を書く奇々羅金鶏が撰者兼スポンサーである入銀物と思われる作品であるが、どちらにも一首ずつ酒樂斎の狂歌が載る。前書では吉原、後書では芝居二丁町である。更に浅野氏は「天明期の歌麿」（『国華』一一一九号所収、平成一〇年・一九九八・三月刊）で、酒樂斎は駿府の遊郭二丁町に住み、酒類の販売を業としていた人物であるとされ、黄表紙『吉野屋酒樂』に酒樂が自分の姿を一枚絵や団扇絵にして売り出したことが出てくるが、実際に名古屋テレビ放送蔵の団扇絵で、酒樂斎が巣廻にしていた歌舞伎役者の二代田市川門之助似顔で描かれた酒樂斎が店の前で煙草を吸っている図（勝川春好画）を紹介している。

ところで、見立絵本『嘶始小通形』は、序文に「小紋新法に曰 京橋の先生は天文を見て小紋を案し 三篇を作て誉を天下に顯す」とあり、山東京伝画作の『小紋裁』（天明四年刊・一七八四）『小紋新法』（天明六年刊・一七八六）『小紋雅話』（『小紋裁』の増補改題、寛政一年刊・一七〇〇）に影響されての刊行と推測される。その見立て小紋には、本書と共通する内容が数多く見られる。例えば本書は「酒中花」に始まり「酒の花」で終わるが、『嘶始小通形』でも酒を題材とした「くだをまきゝれ」「酒やのかり」があり、本書「波の花」と共通する「しほかまのけい」があるなどである。これらにより、本書の作者は酒樂斎瀧麿と推定される。

以上のことから、安永七年（一七七八）序を持つ本書の作者酒樂斎瀧麿は、天明四、五年（一七八四、八五）頃から宿屋飯盛と懇意になり、天明七年（一七八七）頃に四方赤良門に入り、同八年に一枚絵や狂歌絵本などで売り出し、寛政初年（一七九〇・九五）に再び見立絵本を作成した、駿河在の狂歌師であつたことがわかる。

本稿を成すにあたり、国文学研究資料館公募共同研究「近世風俗文化学の形成 忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺」プロジェクト関係者各位、同じく特定研究「近世的表現様式と知の越境 文学・芸能・絵画による総合研究」プロジェクト関係者各位には、多くのご教示をいただきました。感謝申し上げます。

また、川口元氏、後藤憲一氏には、多大なるご芳情とご教示を賜りました。心より御礼申し上げます。

図版の掲載につきましては許可下さいました大阪大学付属図書館に、心より深謝申し上げます。